

狹山市遺跡調査会報告書 第9集

金井林遺跡

柏原金井林地区土地改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

1996

狹山市遺跡調査会

序

狹山市は、昭和40年代後半より急激に都市化が進行し、昭和50年代には人口増加のピークをむかえました。それに伴い土地利用構造も変化し、農業的な土地利用から工業及び都市的土地利用に主体が変化しております。これにより、専業農家戸数の減少、中核農家の固定化、高齢専業農家などの問題が深刻化しつつあります。本市の農業は、都市近郊農業として発展してきましたが、近年のこうした状況から構造的な見直しが必要とされてきました。そのため狹山市では、優良農地の確保と経営規模拡大を図り、農業生産基盤を安定させるため、ほ場整備及び農道整備事業を積極的に進めてまいりました。

反面、こうしたほ場整備などの大規模開発は、埋蔵文化財の範囲内に当ることが多くなっております。狹山市遺跡調査会では、このような事業の遅延を極力避けつつ、市当局との調整のもと緊急に発掘調査を実施してまいりました。本書もそういった成果の一つです。

狹山市は、市内を貫流する入間川に育まれた豊かな環境により、先土器時代から中世まで先人の遺産たる埋蔵文化財が数多く分布していますが、特に縄文時代の遺跡には恵まれています。今回報告の金井林遺跡も、この縄文時代遺跡であり北東に近接する丸山遺跡の先住者たちの活動圏にあたるものと考えられ、当時の集落の領域や生業を考えると性格上興味深いものがあります。本書が、市民の生涯学習や研究者に広く活用され、文化財保護の向上に資することができれば幸いです。

なお、発掘調査から報告書刊行までにご協力をいただいた多くの皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成8年9月

狹山市遺跡調査会

会長 野村 甚三郎

例　　言

1. 本書は、狹山市柏原字金井林730外所在の金井林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、狹山市が行った柏原地区ほ場整備事業に伴うもので、費用の負担も同市が負った。
3. 調査指示通知は、平成4年11月17日付、委保第5の1031号である。
4. 発掘調査は、狹山市遺跡調査会が平成4年7月6日から平成4年10月30日まで実施した。
5. 報告書作成は、平成7年12月18日から平成8年3月29日まで行った。
6. 調査は、10mグリッド法で行い、002-16グリッドの座標値はX=-12780.000、Y=-38820.000で方位はすべて座標北を示す。
7. 遺構図の縮尺は、竪穴状遺構及び土壙が1/40、溝状遺構が1/80である。
8. 遺物実測図の縮尺は、繩文土器1/4、拓影図1/3、石器1/2、1/3とし、各挿図にはスケールを付した。
9. 発掘調査は、石塚和則が担当し、飯田優子、伊倉栄男、薄田明子、加藤船子、久保正雄、坂入しげ子、坂入誠、佐々木美保子、指田ツネ、田口文枝、那須テルヨ、増田早苗、山川淑恵、山本とし子が参加した。
10. 出土品の整理、報告書作成は石塚が担当し、井口恵子、伊藤美穂、今井綾子、佐々木美保子、瀬戸山真由美、増田早苗、山川淑恵の補助を受けた。
11. 本書の編集は狹山市遺跡調査会が行った。
12. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関からご教示・ご協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略）。

金子直行、中平　薰、柳戸信吾、朝埼玉県埋蔵文化財調査事業団、日高市教育委員会、
飯能市教育委員会

目 次

序

例 言

I 調査の概要 1

 1 発掘調査に至る経過 1

 2 発掘調査の組織 1

 3 発掘調査の経過 2

II 遺跡の立地と環境 3

 1 遺跡の概観 3

 2 歴史的環境 3

III 遺構と遺物 8

 1 調査成果の概要 8

 2 遺 構 8

 3 出土遺物 23

IV 結 語 32

挿図目次

第1図 狹山市内遺跡分布図	4
第2図 金井林遺跡調査区位置図	7
第3図 金井林遺跡調査区全測図	9-10
第4図 検出遺構(1)	11
第5図 検出遺構(2)	12
第6図 検出遺構(3)	13
第7図 検出遺構(4)	16
第8図 検出遺構(5)	17
第9図 検出遺構(6)	18
第10図 検出遺構(7)	19
第11図 検出遺構(8)	20
第12図 検出遺構(9)	21
第13図 出土遺物(1)	24
第14図 出土遺物(2)	25
第15図 出土遺物(3)	26
第16図 出土遺物(4)	27
第17図 出土遺物(5)	28
第18図 出土遺物(6)	29
第19図 出土遺物(7)	30

図版目次

図版1 金井林遺跡調査区全景

図版2 検出遺構

- 第1号竪穴状遺構
- 第4号土壤
- 第5・6号土壤
- 第1号溝状遺構
- 第4号溝状遺構
- 遺物集中地点全景

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

狹山市の農業は、昭和40年代に始まる急激な都市化の影響から都市近郊型の側面を強く打ちだしつつ今日に至っている。しかし、工業団地の造成、都心への交通の利便性などから就業機会が拡大し、兼業化の進行や労働力の減少、さらに農業従事者の高齢化と後継者不足が顕著となっている。このような状況の中で、市当局は農業振興地域を中心とした優良農地の確保、農家の経営改善や生産性の向上を図るために、ほ場整備事業を積極的に推進してきた。平成4年に実施された柏原金井林地区ほ場整備事業もその一環である。

平成4年4月、農務課より柏原金井林地区におけるほ場整備事業予定地2,888m²について、埋蔵文化財の有無の照会があった。市教育委員会では予定地全体が周知の遺跡である金井林遺跡の中央に当る旨回答し、記録保存のための発掘調査の実施を指示した。両者協議の上、発掘調査を平成4年7月から10月までに行うことで合意し、教育委員会の斡旋により狹山市遺跡調査会が調査の主体となることとなった。5月には、農務課、遺跡調査会により関係地権者に現地説明がなされ、埋蔵文化財保護とは場整備事業の円滑化のため発掘調査実施の了解を得た。この結果を受けて、農務課からは、平成4年5月21日付で埋蔵文化財発掘調査通知が提出され、7月6日には同課と遺跡調査会間で業務委託契約が締結された。同日、遺跡調査会は埋蔵文化財発掘届を埼玉県教育委員会を経由し、文化庁長官あて提出した。

文化財保護法第57条第1項の規定による、埋蔵文化財発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知は、例言にあるとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 面 積	時 代
金井林遺跡(県遺跡番号22-035)	狹山市柏原1606外	2,888m ²	縄文・奈良・平安

2 発掘調査の組織

1) 発掘調査 (平成4年7月6日～10月30日)

主 体 者 狹山市遺跡調査会 会 長 武居富雄(狹山市教育委員会教育長)
理 事 斎藤勝治(狹山市文化財保護審議委員会委員長)
理 事 山崎 稔(狹山市教育委員会教育次長)
理 事 水越昭久(狹山市教育委員会生涯学習担当参事)
監 事 高橋彦一(狹山市文化財保護審議委員)
監 事 田口定一(狹山市会計課長)

庶務経理 狹山市遺跡調査会 事務局長 牛庭忠洋（狹山市教育委員会社会教育課長）
事務局 石田公一（狹山市教育委員会社会教育課文化財係長）
事務局 小瀬良樹（狹山市教育委員会社会教育課文化財係）
事務局 石塚和則（狹山市教育委員会社会教育課文化財係）
事務局 松島直人（狹山市教育委員会社会教育課文化財係）
調査担当 石塚和則

2) 整理・報告（平成7年12月18日～平成8年3月29日）

主 体 者 狹山市遺跡調査会 会 長 武居富雄（狹山市教育委員会教育長）
理 事 斎藤勝治（狹山市文化財保護審議委員会委員長）
理 事 市村春子（狹山市教育委員会生涯学習部長）
監 事 高橋彦一（狹山市文化財保護審議委員）
監 事 松本喜助（狹山市会計課長）

庶務経理 狹山市遺跡調査会 事務局長 増島長次（狹山市教育委員会生涯学習部社会教育課長）
事務局 小沢卓男（生涯学習部社会教育課長補佐）
事務局 伊藤 清（生涯学習部社会教育課文化財係長）
事務局 小瀬良樹（生涯学習部社会教育課文化財係）
事務局 原 章（生涯学習部社会教育課文化財係）
事務局 石塚和則（生涯学習部社会教育課文化財係）

整理担当 石塚和則

3 発掘調査の経過 一日誌抄一

平成4年7月6日㈪～7月31日㈮

調査区を設定し、表土除去を行う。7月22日より作業員を投入し、遺構確認作業を開始する。
遺構は希薄であるが、調査区北側に縄文土器が集中して出土している。

8月3日㈪～8月31日㈪

8月中旬まで遺構確認を継続する。8月18日より溝状遺構（SD-1～5）の掘り下げを開始するが、猛暑のため難航し、月末までこれに終始する。

9月1日㈫～9月30日㈬

前半は、竪穴状遺構（SX-1）、土壤（SK-1～10）を掘り下げ、セクション図、写真撮影、平面図作成を行う。後半には、003-11グリッドを中心に広がる遺物集中地点の調査を行う。

10月1日㈭～10月30日㈭

前半は、溝状遺構の写真撮影と平面図作成。10月16日に空中写真撮影を実施する。10月26日までに遺物集中地点の調査を終了し、器財等を撤収して現地調査をすべて終了した。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の概観

金井林遺跡（26）は、狭山市柏原字金井林に所在する。市内の位置関係から言えば、西武新宿線狭山市駅から北北西へ3.5kmに位置し、遺跡東側には県道日高・狭山線が通る。地形上では、入間川左岸の通称入間台地のやや奥まった小支谷の左岸に立地し、立地面は南東方向に緩やかに傾斜している。標高は54～56mで、遺跡規模は320m×190mを測る。

同遺跡は、昭和46年から47年にかけて埼玉県教育委員会が実施した県内遺跡分布調査で所在が確認された（埼玉県教育委員会1975）。この結果を受けて、昭和56年度に狭山市史編纂事業の一環として入間川左岸地区遺跡分布調査が行われ、狭山市No.26遺跡（金井林遺跡）として認知されるにいたる（増田他 1983）。当時、採集された遺物は縄文時代中期（勝坂・加曾利E式）、後期（称名寺・堀之内式）、時期不明の鉄滓で、主体は縄文時代中期の集落跡とされた。今回の調査では、前期（黒浜式）の土器片も採集されており、既調査の宇尻遺跡（24）、丸山遺跡（25）などの本遺跡周辺に立地する集落跡と存続期間が一致することになった。

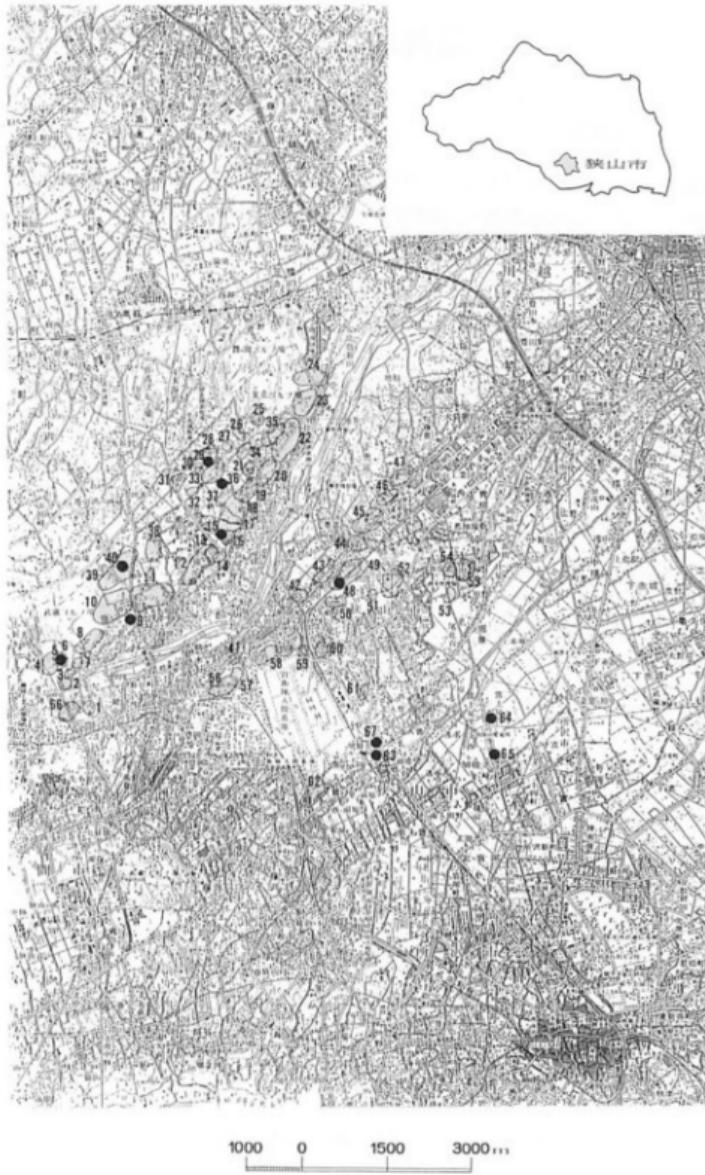
2 歴史的環境 一縄文時代を中心として—

柏原地区は、近年は場整備事業、グランド造成、個人住宅新築などの開発が増加し、平成3年度以降発掘調査が増加している。ここでは、それらの成果を踏まえて入間川左岸地区を中心に縄文時代を概観することとする。

草創期の遺跡は、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）の2遺跡で有舌尖頭器が昭和56年度の分布調査で表採されているが、土器の出土は見ていない。

早期では、平成5年度に調査を実施した高根遺跡（33）で押型文土器の破片が1点出土した。早期前半段階の遺跡は、小畦川流域に多く見られ、本遺跡は位置関係からもそれらとの関連をうかがわせる。早期後半段階では、昭和44年以降、断続的に調査が行われている今宿遺跡（13）で炉穴とともに野島式及び茅山式土器が出土している。また、首都圏中央連絡自動車道建設に伴う調査では、西久保遺跡（39）で炉穴が検出されている（栗岡他 1995）。

前期の遺跡としては、前半段階の花積・関山式段階の遺構検出例がなく、生活痕跡が空白となっている。黒浜期からは遺跡数が増加し、奥富の揚幡木遺跡（45）では昭和56年の発掘調査で台地縁辺に並ぶ住居跡群が検出されている（久保田他 1986）。平成7年度に調査が行われた稲荷上遺跡（47）でも、道路幅という限定された調査ながらも、同期の住居跡群が検出された。両遺跡とともに、入間川右岸に立地している。左岸では、笛井の八木上遺跡（4）があるが、前記2遺跡と同時期である（金子 1990）。前期後半、諸磯式期は圓央道の調査において金井上遺跡（10）、八木上遺跡、八木前遺跡（66）で遺物包含層が確認されている。また、前期終末期に位置づけられる十三菩提式土器もこれらの遺跡から若干出土しており、さらに八木上遺跡においては同期の復元可能土器が出土し注目に



第1図 狹山市内遺跡分布図

狹山市内遺跡一覧（括弧内は、県遺跡番号）

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 東八木窯跡群 (22049) 奈・平 | 35 宮原遺跡 (22017) 繩 (前～後) |
| 2 八木遺跡 (22068) 繩 (中)、奈・平 | 36 下双木遺跡 (22078) 繩 (草) |
| 3 八木北遺跡 (22021) 奈・平 | 37 上双木遺跡 (22077) 繩 (中・後)、奈・平 |
| 4 八木上遺跡 (22022) 繩 (前・中)、奈・平 | 38 上広瀬西久保遺跡 (22073) 奈・平 |
| 5 沢口上古墳群 (22020) 古 (後) | 39 西久保遺跡 (22069) 先、繩 (早)、奈・平 |
| 6 篠井古墳群 (22019) 古 (後) | 40 東久保遺跡 (22070) 先 |
| 7 沢口遺跡 (22080) 繩 (早～中)、古～平 | 41 上諏訪遺跡 (22086) 繩 (中・後)、奈・平 |
| 8 宮地遺跡 (22018) 先、繩 (中)、奈・平 | 42 滝祇園遺跡 (22066) 繩 (前～後)、古～平 |
| 9 金井遺跡 (22071) 中 | 43 蜂 遺跡 (22024) 繩 (中・後)、奈・平 |
| 10 金井上遺跡 (22023) 繩 (前)、奈～中 | 44 戸張遺跡 (22026) 繩 (前・中)、奈・平 |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡 (22005) 繩 (草)、奈・平 | 45 揚櫛木遺跡 (22027) 繩 (前・中)、奈・平 |
| 12 露ヶ丘遺跡 (22004) 繩 (中)、奈・平 | 46 坂上遺跡 (22029) 繩 (中)、奈・平 |
| 13 今宿遺跡 (22002) 繩 (早～中)、奈・平 | 47 稲荷上遺跡 (22032) 繩 (前・中)、奈・平 |
| 14 上広瀬古墳群 (22001) 古 (後) | 48 上中原遺跡 (22025) 先 |
| 15 森ノ上西遺跡 (22079) 先 | 49 中原遺跡 (22025) 繩 (早～後)、奈・平 |
| 16 森ノ上遺跡 (22008) 繩 (中)、奈・平 | 50 沢台遺跡 (22079) 繩 (中)、奈・平 |
| 17 富士塚遺跡 (22009) 繩 (中)、奈・平 | 51 沢久保遺跡 (22041) 繩 (中) |
| 18 烏ノ上遺跡 (22010) 奈・平 | 52 下向沢遺跡 (22042) 繩 (中・後)、奈・平 |
| 19 小山ノ上遺跡 (22011) 繩 (中・後)、古～中 | 53 吉原遺跡 (22067) 繩 (後) |
| 20 御所の内遺跡 (22012) 奈・平 | 54 下向遺跡 (22085) 繩 (前～後) |
| 21 英 遺跡 (22074) 中 | 55 台 遺跡 (22084) 繩 (前～後) |
| 22 城ノ越遺跡 (22013) 繩 (前・中)、奈・平 | 56 稲荷山公園古墳群 (22052) 古 (後) |
| 23 宮ノ越遺跡 (22016) 奈・平 | 57 稲荷山公園遺跡 (22051) 繩 (中) |
| 24 字尻遺跡 (22075) 繩 (前～後)、奈・平 | 58 石無坂遺跡 (22083) 繩 (中)、奈・平 |
| 25 丸山遺跡 (22037) 繩 (前・中)、奈・平 | 59 富士見西遺跡 (22082) 繩 (中)、奈・平 |
| 26 金井林遺跡 (22035) 繩 (前～後) | 60 富士見北遺跡 (22072) 繩 (前・中) 奈・平 |
| 27 鶴田遺跡 (22044) 繩 (前・中) | 61 富士見南遺跡 (22081) 繩 (中) |
| 28 上の原東遺跡 (22065) 奈・平 | 62 町屋道遺跡 (22088) 繩 (前～後)、奈・平 |
| 29 上の原西遺跡 (22063) 繩 (中) | 63 七曲井 (22046) 中 |
| 30 半貫山遺跡 (22061) 中 | 64 堀兼之井 (22047) 中 |
| 31 稲荷山遺跡 (22058) 繩 (後) | 65 八軒家の井 (22076) 中 |
| 32 前山遺跡 (22059) 繩 (中) | 66 八木前遺跡 (22087) 繩 (前・後) |
| 33 高根遺跡 (22062) 繩 (早・中・後) | 67 堀難井遺跡 (22089) 中 |
| 34 町久保遺跡 (22034) 繩 (中)、奈～中 | |

値する。前期の様相は、市内において本格的な居住が開始されたという点に尽きるが、集落形成が黒浜式期に集中するなど周辺地域の状況に呼応しており、広範囲の考察が比較的容易になりつつあると言えよう。

中期の遺物は、市内遺跡67箇所中35箇所で確認されている。具体的には、中期中葉勝板式期から後半加曾利E II式期に集中し、以後減少していく。市内の代表的な遺跡としては、県選定重要遺跡である笹井に所在する宮地遺跡(8)がある。現在までに5回にわたって調査が実施され、中期末の敷石住居跡2軒を含む69軒の住居跡が検出され、大規模な双環状集落の存在が想定されている。柏原地区では、平成3年度に調査が行われた丸山遺跡(25)があり、略環状に分布する14軒の住居跡が確認された。その状況から、宮地遺跡とは異なり比較的小規模な集落と考えられる。丸山遺跡周辺には、今回報告の金井林遺跡の他、小山ノ上遺跡(19)、城ノ越遺跡(22)、宮原遺跡(35)といった中期の遺物が発見された遺跡群が分布する。宮原遺跡は現在まで調査が実施されていないが、前二者については遺物、土壙及び集石土壙などが検出されつつも居住構造が認められない点、丸山遺跡との関連が注目される。また、城ノ越遺跡では、平成3年度の調査において陥穴が検出されており、一集落の用益圏を考える上で興味深い。中期終末では、遺跡数及び検出構造の急激な減少が看取される。当該期の構造が検出された遺跡は、宮地遺跡、掲櫛木遺跡、森ノ上遺跡(16)、字尻遺跡(24 石塚 1995)がある。いずれも、小数の柄鏡形住居跡が1～数軒単位で散在する傾向が見て取れる。

後期段階では、現在までに発掘調査がなされた遺跡として字尻遺跡と高根遺跡があり、前者では柄鏡形(敷石)住居跡1軒、後者では土壙と単独埋甕が発見された。当該期の遺跡として注目されるものに宮原遺跡がある。本遺跡は、前述のとおり調査のメスが入っていないため実態が不明確であるが、分布調査時に多量の石錐が表採されており、他に堀之内式期から加曾利B式期の土器片が出土している。加曾利B式期の遺跡としては市内唯一のものであるため、調査の実施が期待される。なお、市内においては未だ縄文時代晩期の遺跡は発見されていない。



第2図 金井林遺跡調査区位置図

III 遺構と遺物

1 調査成果の概要

金井林遺跡の総面積は推定で60,800m²を測る。今回の調査は、遺跡のほぼ中央部分、2,888m²を対象として実施した(第2図)。検出された遺構は、竪穴状遺構1基、土壙10基、溝状遺構5条、遺物集中地点2箇所である(第3図)。各遺構の帰属時期であるが、竪穴状遺構は確認面から床面に及ぶ擾乱が著しく、遺存状態は劣悪であった。出土した縄文土器も中期から後期にわたり、明確な時期を限定し得なかった。土壙については第3・4号土壙以外は、いずれも覆土の観察から中世以降の所産と判断した。溝状遺構は掘削方法や方向から考えると、近世以降の所謂「根切り溝」あるいは「地境溝」と思われる。遺物集中地点は、縄文前期～後期にかけて形成されたもので、調査区北側に存在が考えられる小支谷埋没時に流れ込んだものと思われる。

2 遺 構

竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構(第4図1)

本遺構は、007・008-14グリッドで検出された。南側約1/3は調査区外にある。擾乱が著しく、一部は床面にまで及んでいた。

平面形はやや不整な楕円形を呈し、短径は3.71mで確認面から床面までの深さは8～18cmを測る。床面は凹凸があり、中央に向かって窪んでいる。壁は比較的緩やかに床面に至る。炉址、柱穴等の屋内施設は一切検出されなかった。

出土遺物には縄文土器片及び近現代の陶器があるが、いずれも出土状況から混入と思われるため、本遺構の時期は不明としておく。

(覆土)

第1層 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含有する。

第2層 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。

土 壤

第1号土壙(第4図2)

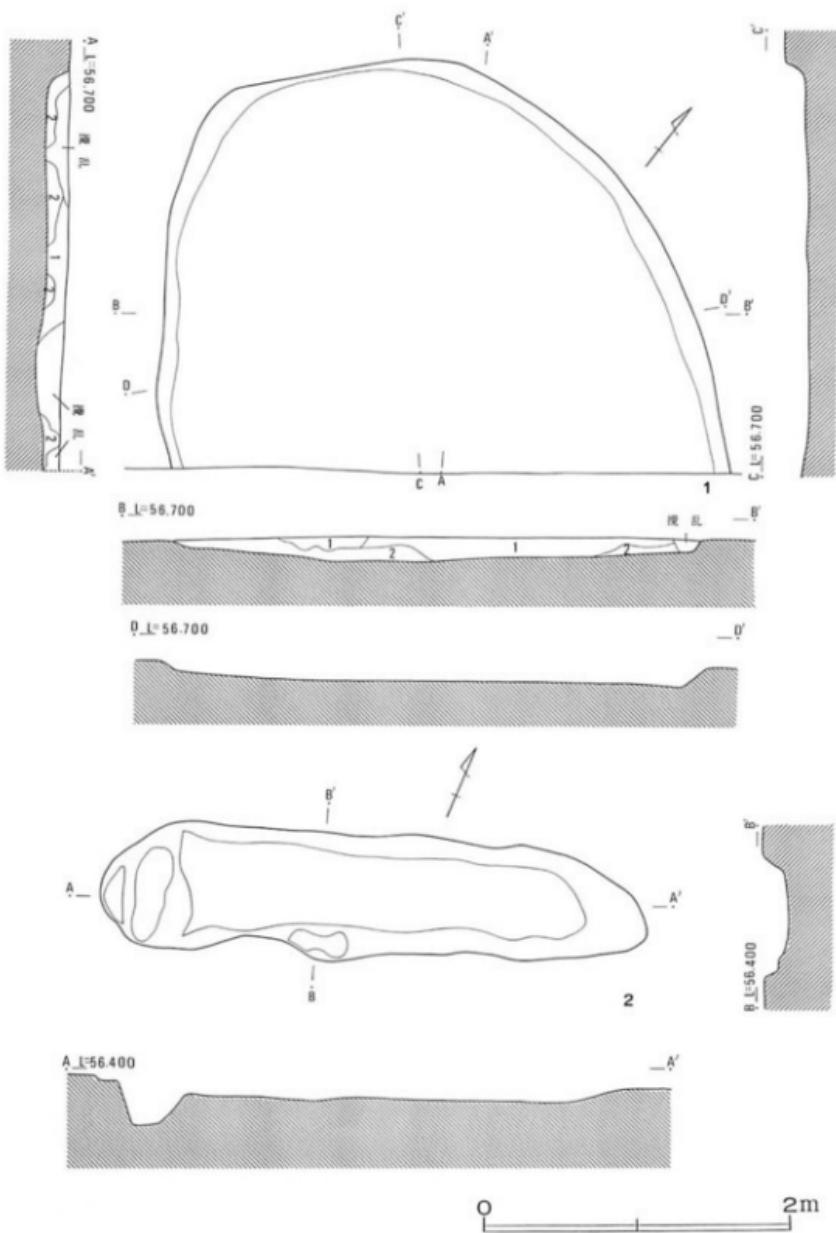
006・007-15グリッドで検出された。第10号土壙が西側に隣接する。長軸方向が一致しているため、両者で溝状遺構となる可能性も否定できない。

平面プランは、不整長楕円形を呈している。長径3.75m、短径0.89mを測る。壙底は概ね平坦で、確認面からの深さは、西隅の窪み部分で39cm、その他の部分では10～14cmである。

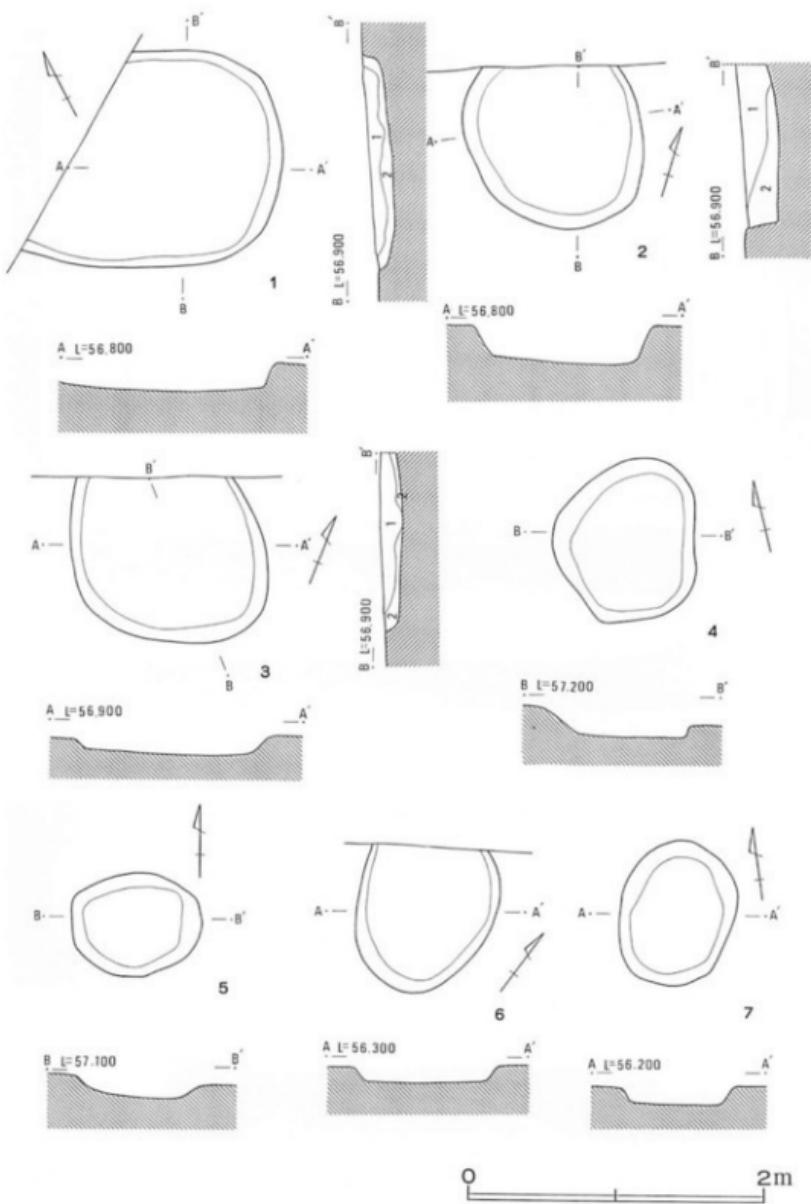
出土遺物には、縄文土器片4点があるが、混入と考えられる。

<50%に縮小>

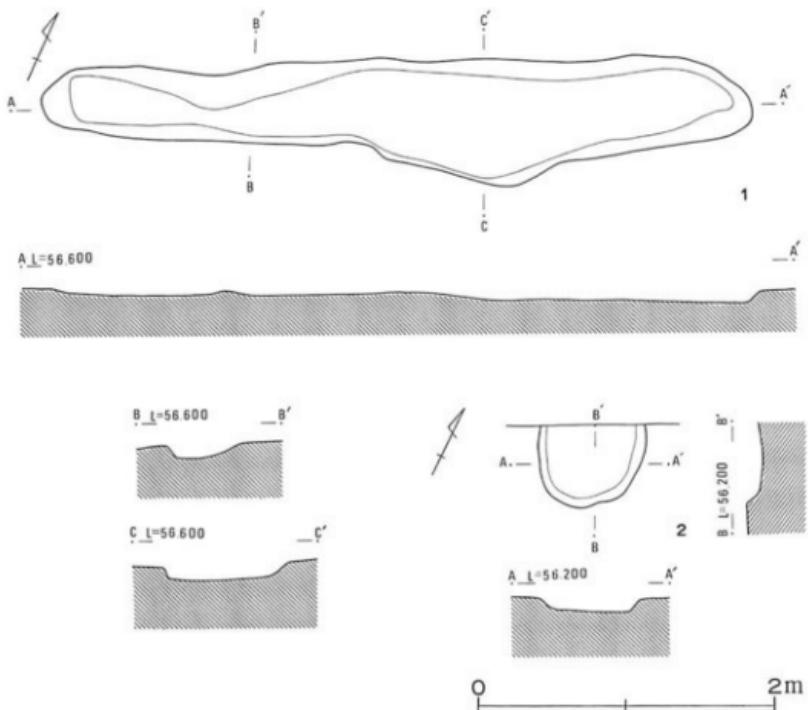
卷之三 艺文志



第4図 検出遺構(1)



第5図 検出遺構(2)



第6図 検出遺構(3)

第2号土壙（第5図1）

010-11グリッドに位置する。北側約1/4が調査区外にある。

平面プランは、比較的整った楕円形を呈する。長径推定1.9m、短径1.48mを測る。壙底は概ねフラットで、確認面からの深さは、18~22cmである。

出土遺物には繩文土器片の細片数点があるが、磨耗が著しく時期も不明である。

（覆土）

第1層 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含有する。

第2層 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

第3号土壙（第5図2）

010-10グリッドに位置し、単独で検出された。北側の一部が調査区外にかかる。

平面プランは、整った楕円形を呈する。長径は推定1.4m、短径1.22m、確認面からの深さは

22～25cmを測る。

出土遺物はないが、覆土の状況から縄文時代のものと考えられる。

(覆土)

第1層 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含有する。

第2層 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。

第4号土壤（第5図3）

010-9グリッドで検出された。北側約1/4が調査区外にある。

平面プランは、やや不整な楕円形を呈するものと思われる。長径は推定1.5m、短径1.32m、確認面からの深さは12～16cmを測る。

出土遺物には縄文土器片2片のみであるが、覆土の状況からも縄文時代のものと考えられる。

(覆土)

第1層 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含有する。

第2層 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第5号土壤（第5図4）

011-3グリッドで検出された。北側に第6号土壤が近接する。

平面プランは、やや不整な楕円形を呈する。長径は1.5m、短径1.32m、確認面からの深さは18cmを測る。

出土遺物が皆無であるため、時期は不明である。

第6号土壤（第5図5）

011-3グリッドに位置する。南側には、第5号土壤が検出されている。

平面プランは、東西に長軸を有する不整楕円形である。長径は0.91m、短径0.72m、確認面からの深さは10cmを測る。

出土遺物が無いため、時期は不明である。

第7号土壤（第5図6）

007-3グリッドで検出された。同グリッド内に第8号土壤が位置する。

北側の一部が調査区外にあるため全体形は不明であるが、概ね楕円形を呈するものと考えられる。長径は推定1.2m、短径0.99m、確認面からの深さは10cmを測る。

出土遺物は無く、時期は不明である。

第8号土壤（第5図7）

第7号土壤と同じく、007-3グリッドで検出された。

平面プランは、やや不整な楕円形を呈する。長径は1.1m、短径0.78m、確認面からの深さは11cm

を測る。

出土遺物は無く、時期は不明である。

第9号土壙（第6図2）

007-4グリッドで検出された。

北側約1/3が調査区外にあるため全体形は不明であるが、概ねやや不整な楕円形を呈するものと思われる。長径は推定0.9m、短径0.72m、確認面からの深さは8cmを測る。

出土遺物が無いため、時期は不明である。

第10号土壙（第6図1）

第1号土壙に隣接して、007-14・15グリッドで検出された。長軸方向が一致することから、両者で溝状遺構となる可能性が高い。

平面プランは、やや不整な長楕円形を呈する。長径は4.9m、短径0.34～0.66m、確認面からの深さは4～8cmを測る。

出土遺物は無く、時期は不明である。

溝状遺構

第1号溝状遺構（第7～9図）

012-6・7、013-4・5グリッドで検出されたが、両端は調査区外に伸びるものと考えられる。

全体の印象は直線的で整った感がある。確認された部分での幅は、0.8～1.34m、確認面からの深さは、40～60cmを測る。断面形は、箱薬研の下半部に近い形状を呈している。

覆土中からは、磨耗した縄文土器片が数片出土したが、いずれも混入と思われる。時期、用途等については近世以降の地境あるいは根切りの溝が考えられるが、断定はできない。

（覆土）

第1層 黒褐色土 やや灰色がかった色調を呈する。多量のローム粒の他、少量の炭化物、焼土粒を含有する。

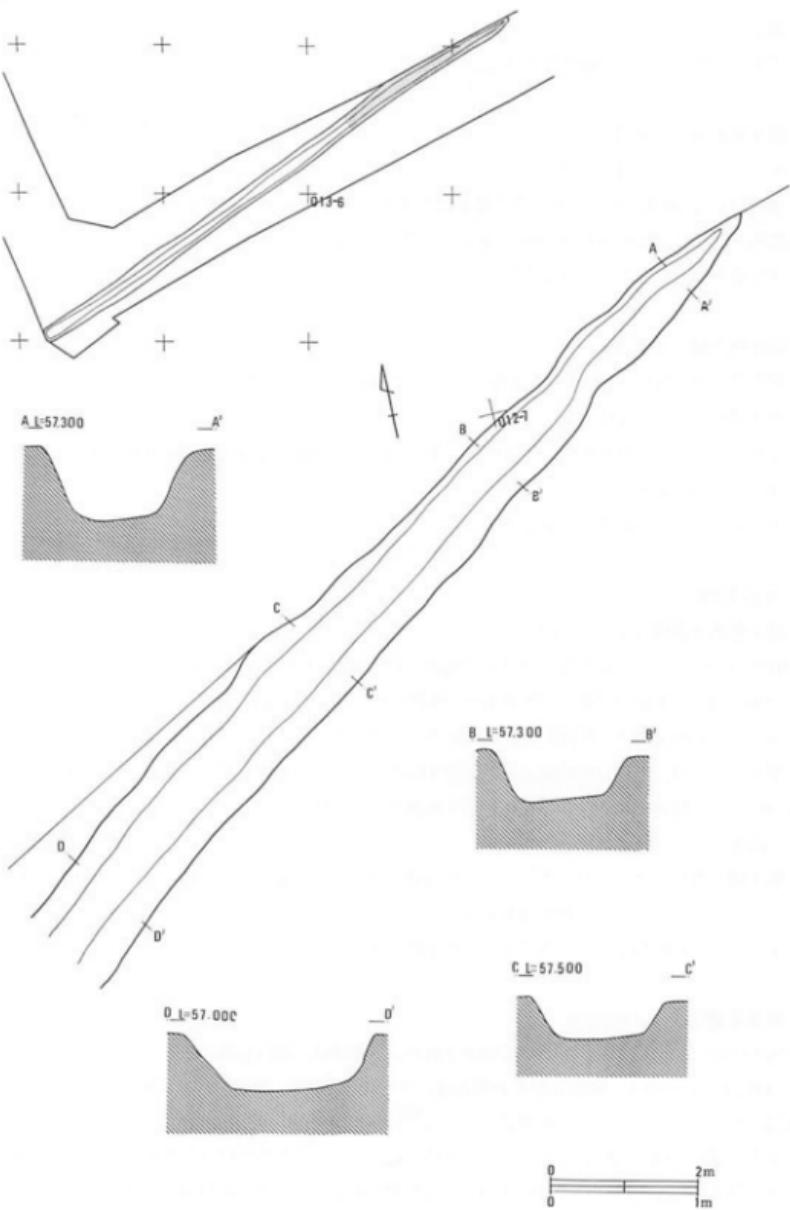
第2層 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

第2号溝状遺構（第10図）

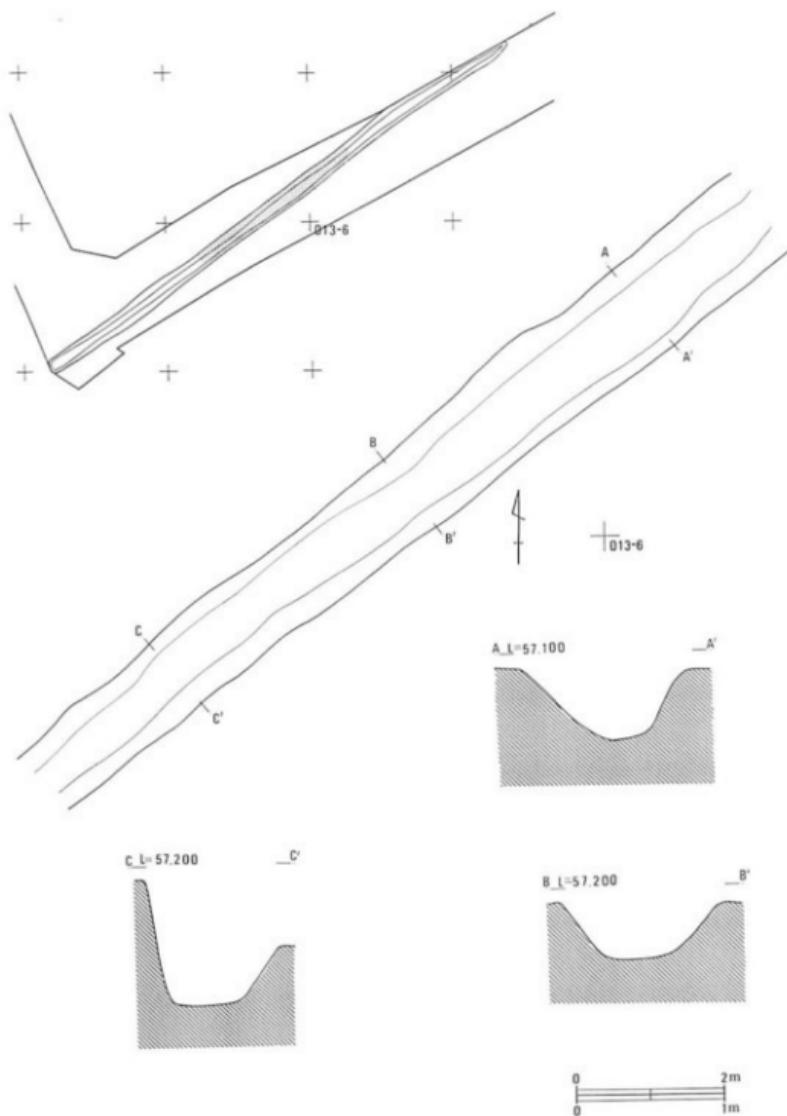
009・010-2グリッドにわたって検出された。一部橋状に地山が残る。

幅は、0.64～2.1m、確認面からの深さは、65～84cmを測る。断面形は、箱状を呈する。調査時の所見では、溝というより芋穴が連続しているといった印象があった。

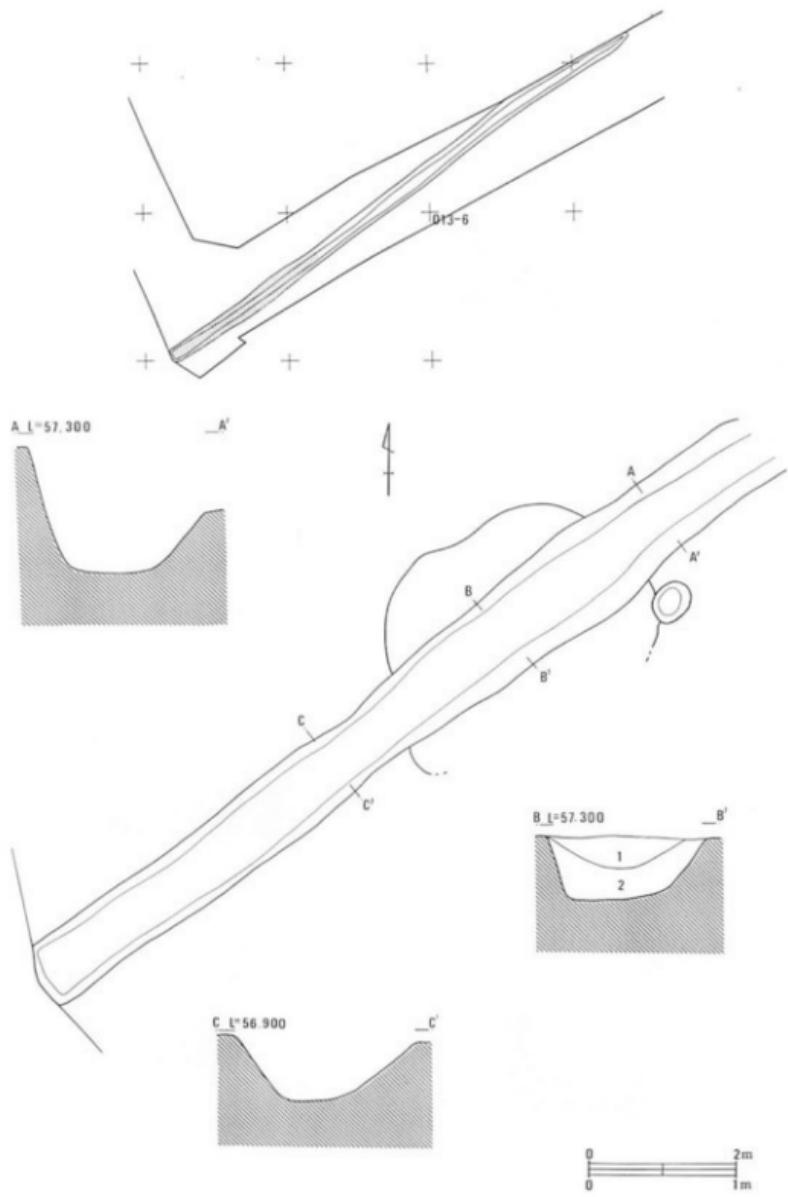
第1号溝状遺構と同様、覆土中からは磨耗した縄文土器片が数片出土したが、いずれも混入であろう。時期、用途等については前述のように芋穴、あるいはそれを再利用した地境や根切りの溝が考えられ、時期も近世以降とすることができよう。



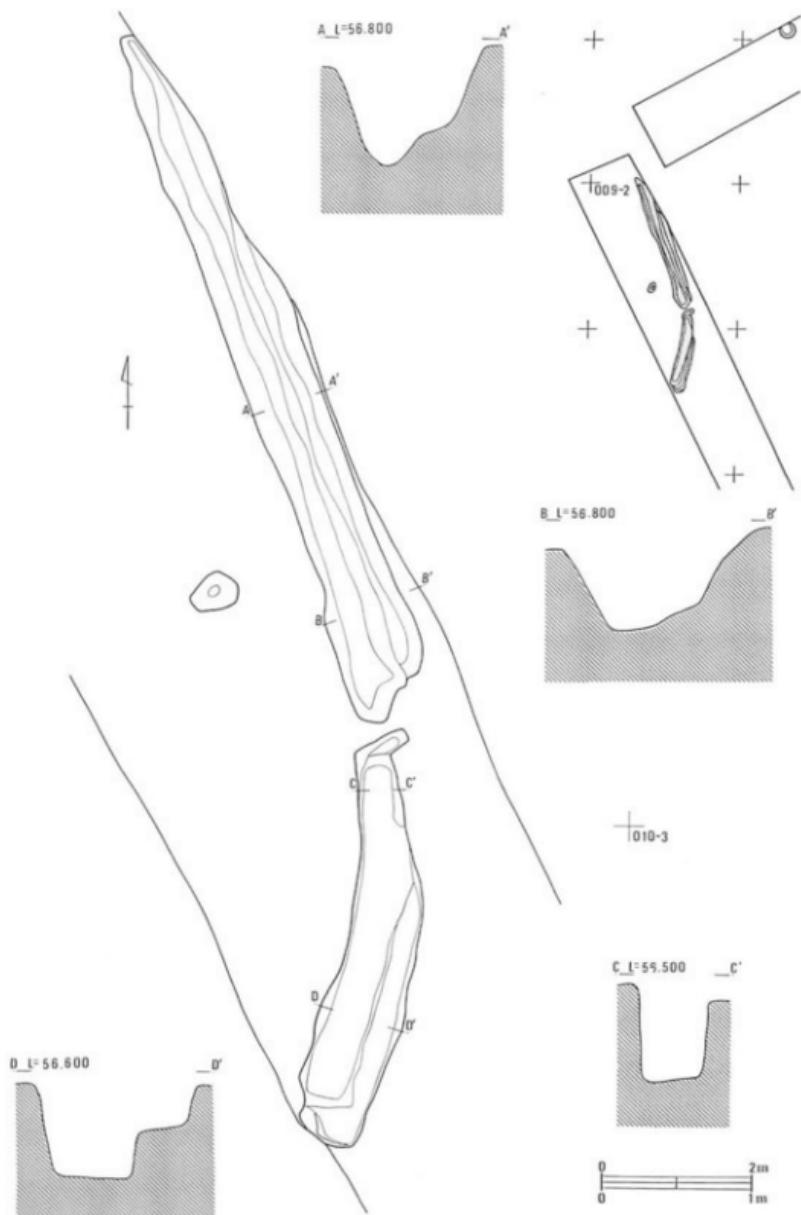
第7図 検出遺構(4)



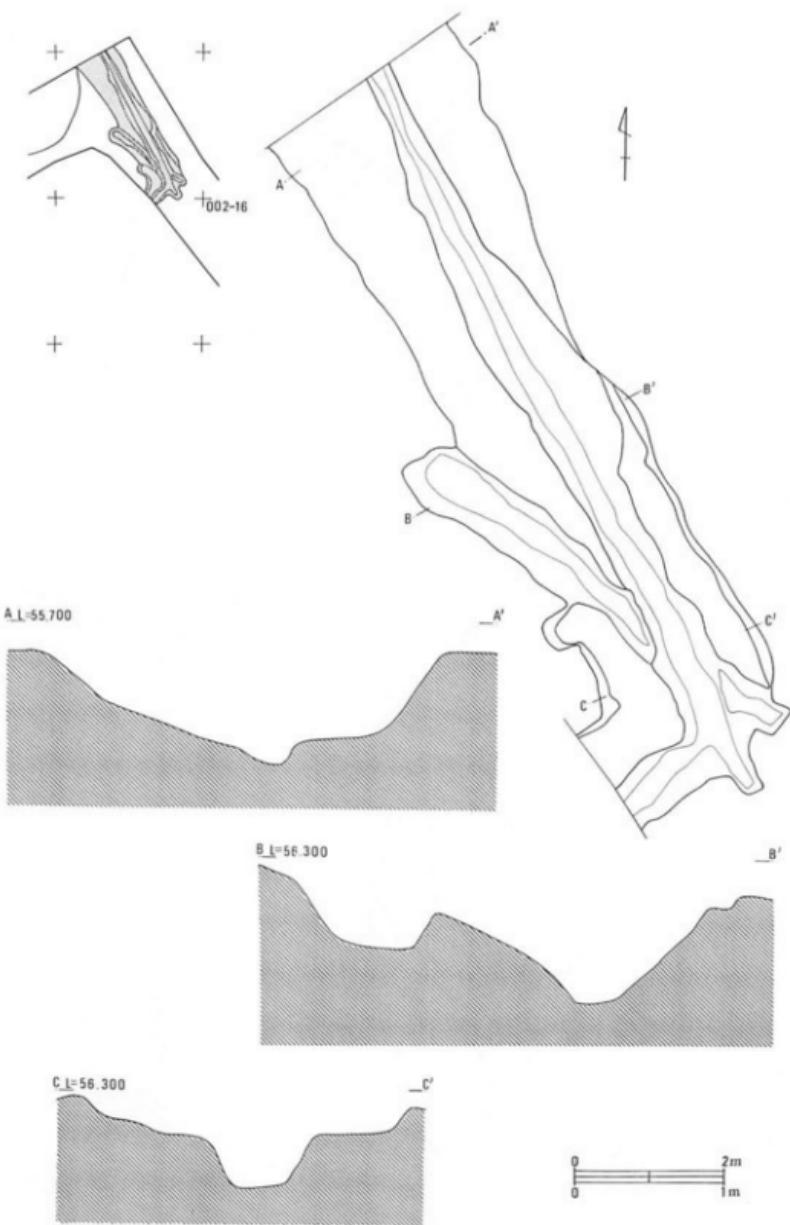
第8図 検出遺構(5)



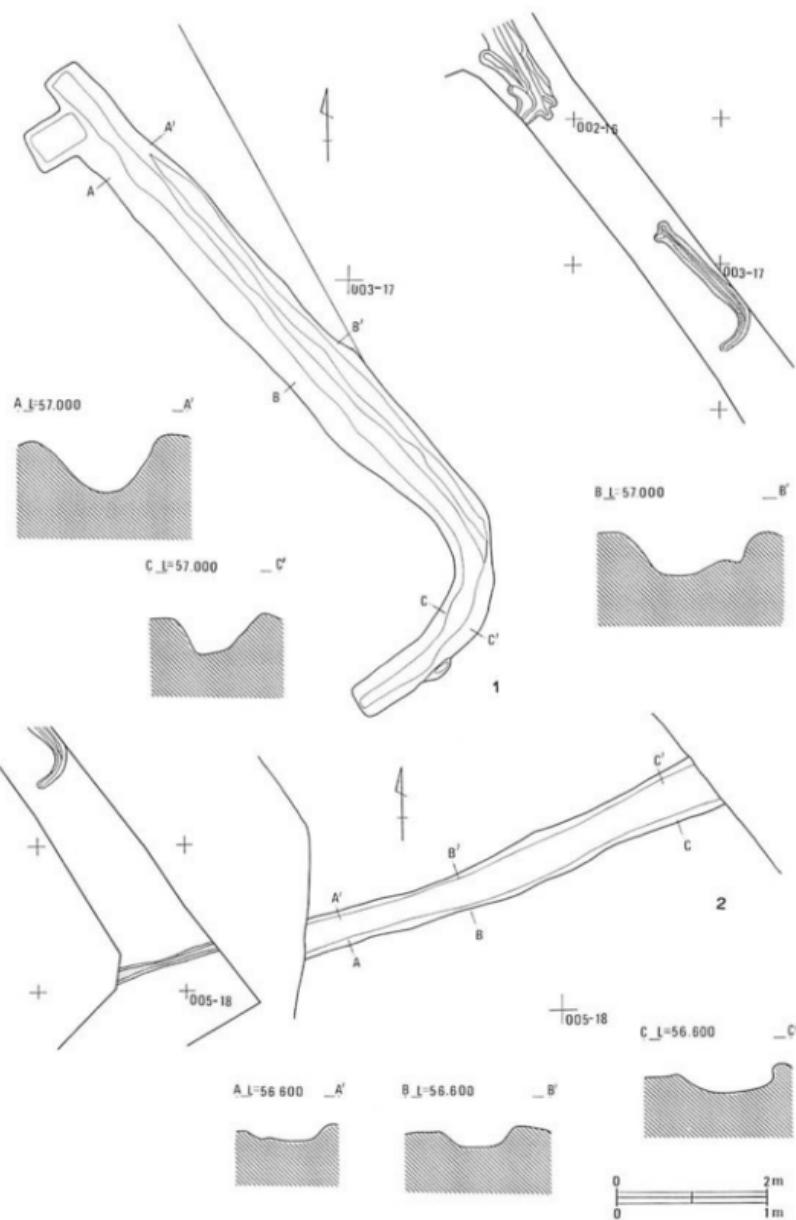
第9図 検出遭構(6)



第10図 検出遺構(7)



第11図 検出遺構(8)



第12図 検出遺構(9)

第3号溝状遺構（第11図）

001・002-15グリッドで検出された。002-15グリッドでは、「L」状に曲っている。

幅は、1.56～2.6m、確認面からの深さは、65～80cmを測る。断面形は、緩やかな薺研状を呈するが、一部芋穴状になっている所もある。

遺物は磨耗した縄文土器片が数片のみで、いずれも混入と考えられる。時期、用途等については近世以降の地境や根切りの溝が考えられる。

第4号溝状遺構（第12図1）

002-003-16、003-17グリッドで検出された。東端で「L」状に曲るが、その方位は第3号溝状遺構と大略一致している。

幅は、0.58～1.1mを測る。確認面からの深さは、32～45cmである。両壁は緩やかに溝底に至る。磨耗した縄文土器片が数片出土したが、いずれも混入と思われる。時期、用途等については、他の溝状遺構と同様、近世以降の地境あるいは根切りの溝とできよう。

第5号溝状遺構（第12図2）

004-17・18グリッドで、調査区を横切って検出された。

幅は、0.44～0.82mを測る。確認面からの深さは、8～15cmである。

数点の縄文土器片が出土したが、いずれも混入と考えられる。他の溝状遺構と同様、近世以降の地境あるいは根切りの溝と判断した。

3 出土遺物

土 器

第1号竪穴状遺構出土土器（第13図1～20）

覆土出土の土器片の内、比較的状態の良好なものを図示した。1は中期前半、2～13は中期後半、14～16は後期初頭、17～20は後期前半である。

1は、深鉢の胴部破片で勝板式である。縦位の梢円形文に爪形文を施している。

2～13は加曾利E式に比定できよう。5・6以外は胴部破片で、7・8には幅広の懸垂文が認められる。地文は、4・6・9が単節RL、3・7・8・12には単節LRを施している。なお、10・11は同一個体である。

14～16は、深鉢の口縁部破片である。いずれも、単節LRを施している。

17～20は、後期前半、称名寺式に比定できよう。いずれも細かい単節LRを斜位、縦位、横位で充填施文している。

第1号土壤出土土器（第13図21、第14図1～4）

第13図21は中期後半、加曾利E式の深鉢の底部である。懸垂文の下端が認められるが、単位は不明である。地文には、無節Lを施す。

第14図1～4は、いずれも深鉢の胴部破片である。1は、細かい単節LRを横位に施文している。2には、懸垂文が認められる。地文は単節LRで縦位に施文している。

3・4は後期の所産で、称名寺式に比定できよう。単節LRを横位、斜位などで充填する。

第4号土壤出土土器（第14図5・6）

いずれも深鉢の胴部破片である。5は、単節RLを斜位に施文している。6は、後期称名寺式で単節LRを充填施文している。

第3号溝状遺構出土土器（第14図7・8）

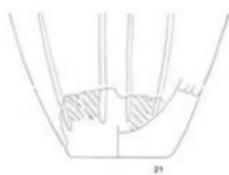
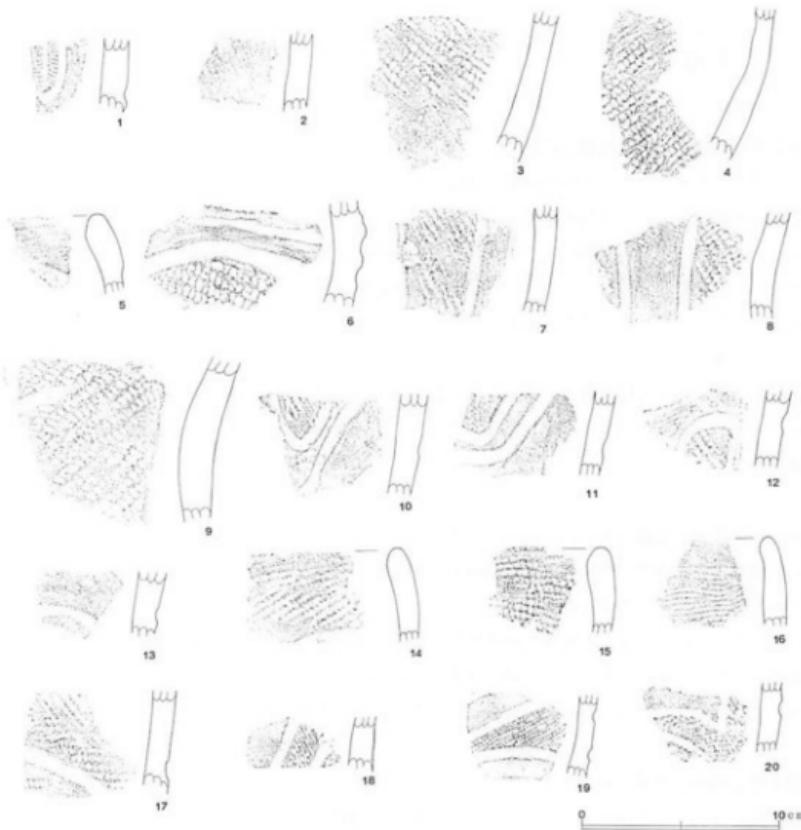
第14図7は、加曾利E式の口縁部破片で、地文は単節RLの横位施文である。8は後期のもので称名寺式とした。磨耗が著しいが、地文は単節RLである。

遺物集中地点出土土器（第14図9～27、第15～17図）

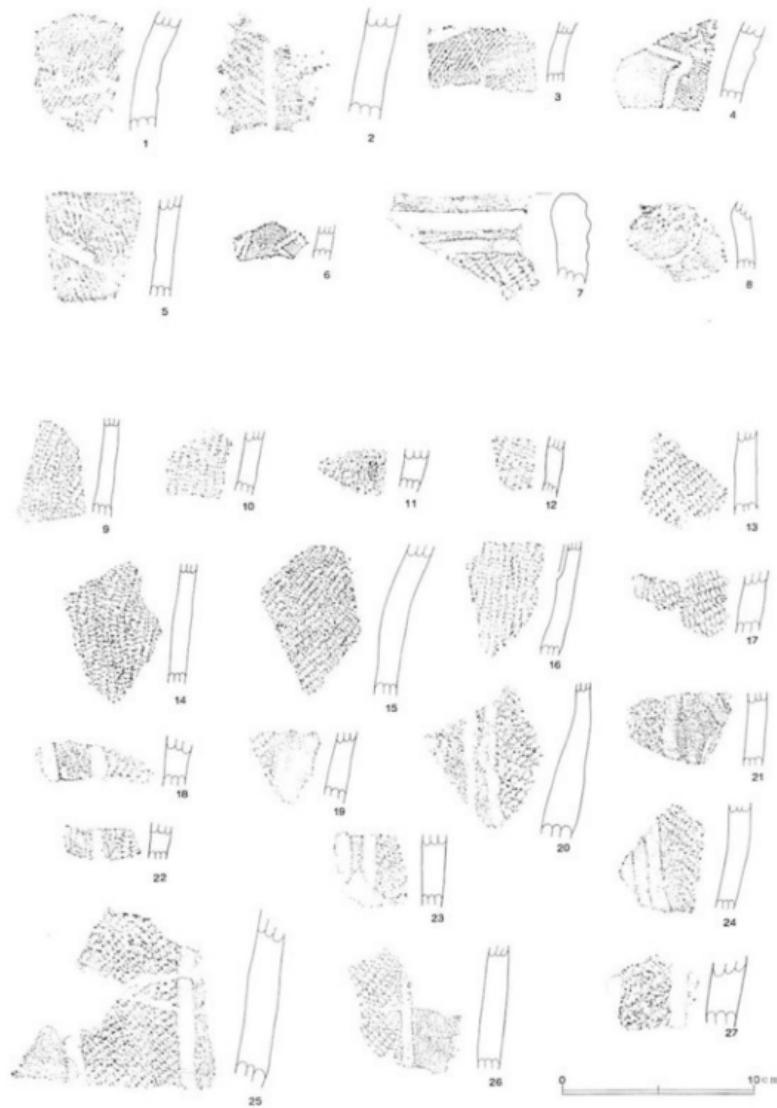
遺物集中地点は、001～14、002～12・13、003～11・12グリッドに広がる（第3図）。遺物包含層中には遺構は検出されていないため、各グリッド別に比較的の遺存状態の良いものを提示する。

003～11グリッド出土土器（第14図9～27、第15図1～21）

9～17は、深鉢形土器の胴部破片で、地文のみ施されている。いずれも、単節RLで10・16は斜位施文、他は縦位である。17～27は、加曾利E式の深鉢胴部破片である。いずれも懸垂文が認められる。地文は24が単節LR縦位、他は単節RL縦位施文で、25のみ0段多条と思われる。



第13図 出土遺物(1)



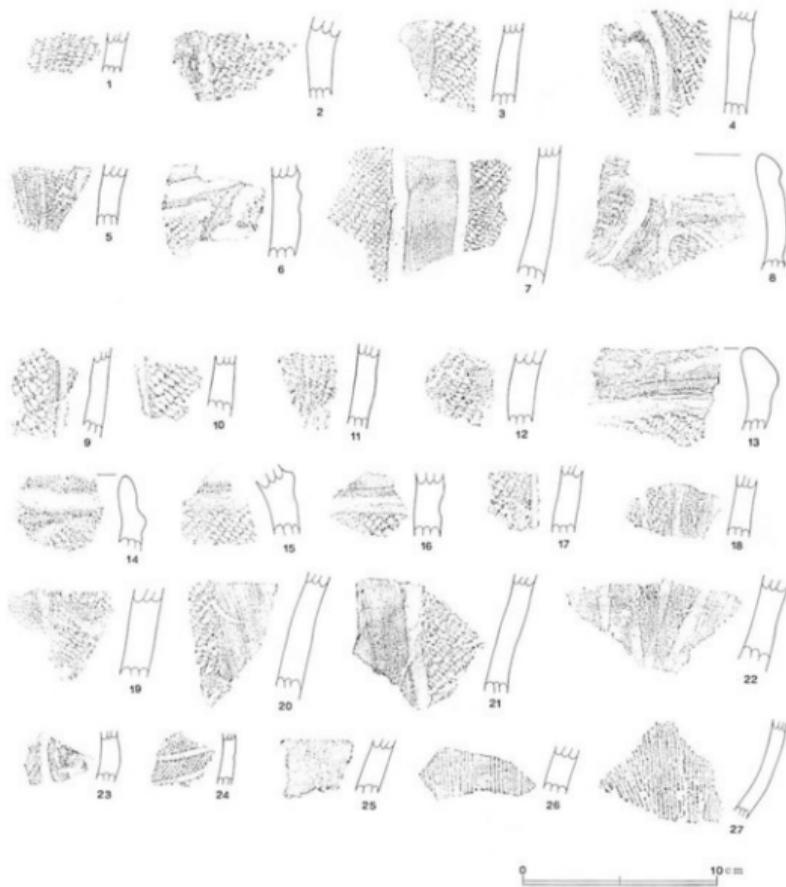
第14図 出土遺物(2)



第15図 出土遺物(3)

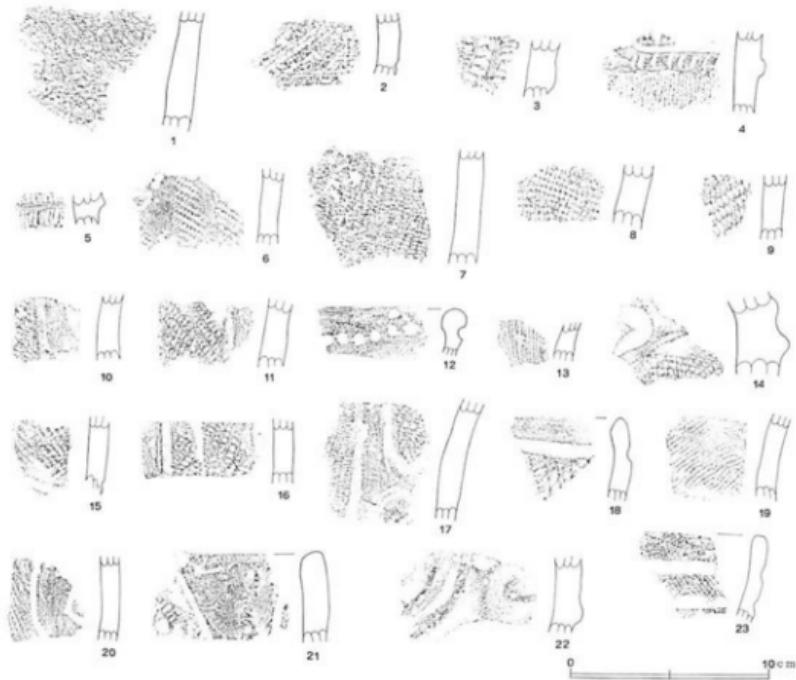


第16図 出土遺物(4)



第17図 出土遺物(5)

第15図1は、比較的大形の破片から復元実測したもので、加曾利E式の深鉢である。胴部中位に弱い括れがあり、上半部には地文の条線を、下半部には逆「U」字状の区画と巻状懸垂文を交互に配す。単位は不明。逆「U」字状懸垂文の内側には単節R Lを縦位に施している。沈線の一部には上位の地文条線を残す。2~16は深鉢の破片で、加曾利E III式と考えられる。2・3・8・11・12は口縁部破片で、他は胴部破片である。4は逆「U」状区画、5は渦巻文、6・7には「H」状区画が認められる。地文は、2~6が単節R L、9・10には単節L R、11~15が無節Lである。16~21は鉢形土器の破片で、17~19が口縁部破片、他は胴部である。地文には、いずれも条線を施す。



第18図 出土遺物(6)

002-12グリッド出土土器 (第16図 1~16)

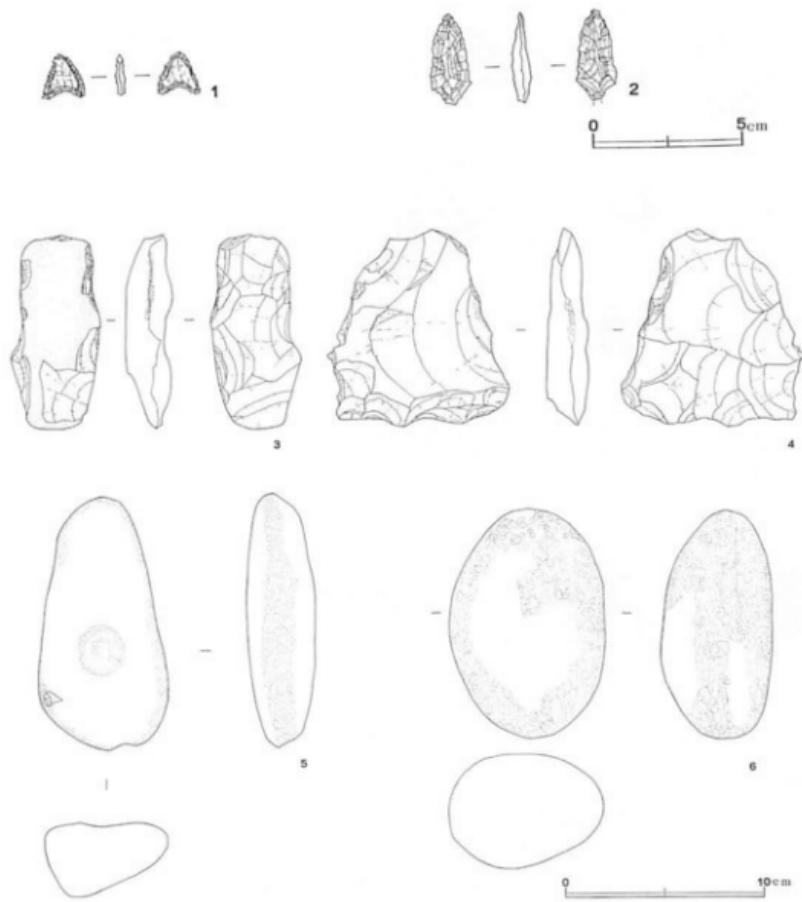
1~17は、加曾利E式の諸段階に比定した。いずれも胴部破片である。1~5は地文のみで、7~11には沈線による懸垂文、12~15には隆線による渦巻文の一部、6・17に蕨状懸垂文が認められる。地文は1~9・14~16が単節RL、10~13が単節LR、5が条線をそれぞれ施文している。

003-12グリッド出土土器 (第16図18~28)

18~24は深鉢で、23のみ口縁部破片である。20・21・24には沈線による懸垂文が認められる。22は、「H」字状区画の一部と考えられる。地文は18~21が単節RL、23は無節L、24には条線がそれぞれ施文されている。25~28は鉢形土器の胴部破片で、地文は条線が施されている。いずれも加曾利E式に位置付けられよう。

002-13グリッド出土土器 (第17図 1~8)

6・8は深鉢口縁部破片で、他は胴部破片である。4には隆起線による渦巻文の一部が認められる。地文は1~3・5・7・8に単節RLが、4・6に単節LRが施文されている。いずれも、加曾利E式に比定することができよう。



第19図 出土遺物(7)

001-14グリッド出土土器 (第17図 9~27)

1~21・25~27は中期の所産で加曾利E式、23・24は後期称名寺式、22は堀之内式と思われる。13~16は口縁部及びその付近の部位で、他は胴部破片である。口縁部破片は、幅広の隆帯をもって区画文を作出している。9・10・17~21には、懸垂文が残存する。地文は、15・24が単節L R、22が沈線、25~27が条線で、他はすべて単節R Lを施している。

表探土器（第18図）

遺構確認作業中に出土したものである。

1・2は前期黒浜式に比定できよう。1は、無節Lを横位に施文、2は単節LR横位施文後に沈線を引く。3～5は勝坂式で、3・5には爪形文が残る。4は円筒形の深鉢で、隆帶上に刻目を施している。地文は撚糸Iである。6～19・21・22は加曾利E式と思われる。12・14・18・21・22は口縁部あるいはその付近で、他は胴部破片である。12は、円形の刺突を口縁部に1条巡らしている。17には「H」字状の区画が見られる。地文は、7・9・10・14・16～18・21に単節RL、6・8・11・15に単節LR、19には無節L、13には条線をそれぞれ施している。

20・23は後期の所産で称名寺式に比定できよう。いずれも目の細かい繩文を施文する。20は単節LR、23は単節RLである。

石 器

表探石器（第19図）

いずれも遺構確認調査中に出土したものである。

1は、石鐵でチャート製で、完形品である。両面に主要剝離面を残す。基部の抉りは顕著ではない。2は有茎の石鐵で、茎の先端を欠損する。チャート製で、比較的粗い作りである。

3・4は打製石斧である。3は短圓形を呈する。正面に自然面を残し、一部刃部に及ぶ。両側縁に敲打が加えられている。4はやや不定形ながら、撥形を呈する。正面に主要剝離面を残し、刃部は両面からの剝離によって作出されている。側縁一部に敲打痕を残す。

5・6は、敲石である。両者ともに砂岩製で、敲打痕は主として周縁部に認められる。5は、中央部に凹みを有する。

IV 結 語

今回の調査では、当初想定されていた縄文時代の集落跡の検出は成らなかった。検出された縄文時代の遺構は、第3・4号土壙のみである。これらの遺構も、覆土観察の結果から判断したもので断定し得るものではない。ただし、過去に実施された表面採集や調査区北側で確認された遺物集中地点の在り様から、本遺跡の性格は他の遺跡の所謂「領域」の一部として機能していたとすることができよう。その期間は、出土した土器から前期黒浜式期より後期堀之内式期に及ぶ。本遺跡と同じ様な傾向をもつ遺跡としては、陥穴のみ検出された城ノ越遺跡(1)や、焼石土壙が4基まとまって検出された小山ノ上遺跡(2)等が上げられる。特に中期において、これらの遺跡の核となっていたと考えられるのが、本遺跡と谷をはさんで隣接する丸山遺跡(3)である。また、後期では現在まで調査が行われていないが、城ノ越遺跡の北側に位置する宮原遺跡が焦点になるものと考えられる。今後、これらの遺跡の調査を進めながら、遺跡群の関係論や「場」の機能論を深化させていかねばならない。そのためにも、本遺跡のような遺構をほとんど伴わない事例も軽視できないのである。

(註)

- (1) 平成3年度に実施された第8次調査で、崖線に沿って2基の陥穴が検出されている。形状、覆土の状況から縄文時代のものと判断した。出土遺物は無い。現在、狭山市教育委員会で報告書作成作業を進めている。
- (2) 平成5年度の調査で、第7次に当る。
- (3) 平成3年度に調査を実施した。縄文時代中期（勝坂～加曾利E1期）の陥穴住居跡14軒が検出された。現在、狭山市遺跡調査会が報告書作成作業を進めている。

参考文献

- 石塚 和則 「字尻遺跡」 狹山市遺跡調査会報告書 第8集 1995
金子 直行 「八木上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第91集 1990
栗岡 利他 「西久保／金井上」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第156集 1995
久保田福造他 「狹山市史 原始・古代資料編」 1986
増田 正博他 「狹山市遺跡分布調査報告書 第1集」 狹山市史編さん調査報告書12 1983



金井林遺跡調査区全景

図版－2



第1号竪穴状遺構



第4号土壤



第5・6号土壤



第1号溝状遺構



第4号溝状遺構



遺物集中地点全景

平成8年9月15日 印刷

平成8年9月30日 発行

狹山市遺跡調査会報告書 第9集

金井林遺跡

柏原金井林地区土地改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

発行 狹山市遺跡調査会

狹山市入間川1-23-5

電話 0429(53)1111

印刷 望月印刷株式会社

大宮市桜木町4-444

電話 048(641)6651

報告書抄録

ふりがな	かないばやしいせき							
書名	金井林遺跡							
副書名	柏原金井林地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第9集							
著者氏名	石塚 和則							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1-23-5 TEL04-2953-1111							
発行年月日	西暦1996(平成8)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間 (m)	調査面積 (m ²)	調査原因
市町村	遺跡番号	北緯	東經					
かないばやしいせき 金井林遺跡	さいたまけんさやまし 埼玉県狭山市 おとし 柏原1606外	22	35	35.88671	139.399433	19920706 ～19921030	2,888	江場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
金井林遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安時代		堅穴状遺構 土壙 溝状遺構 遺物集中地點	1基 10基 5条 2箇所	縄文土器・石器		

【正誤表】

金井林遺跡

(狹山市遺跡調査会報告書 第9集)

ページ	行	誤	正
2ページ	13行目	増島長次	増嶋長次
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038